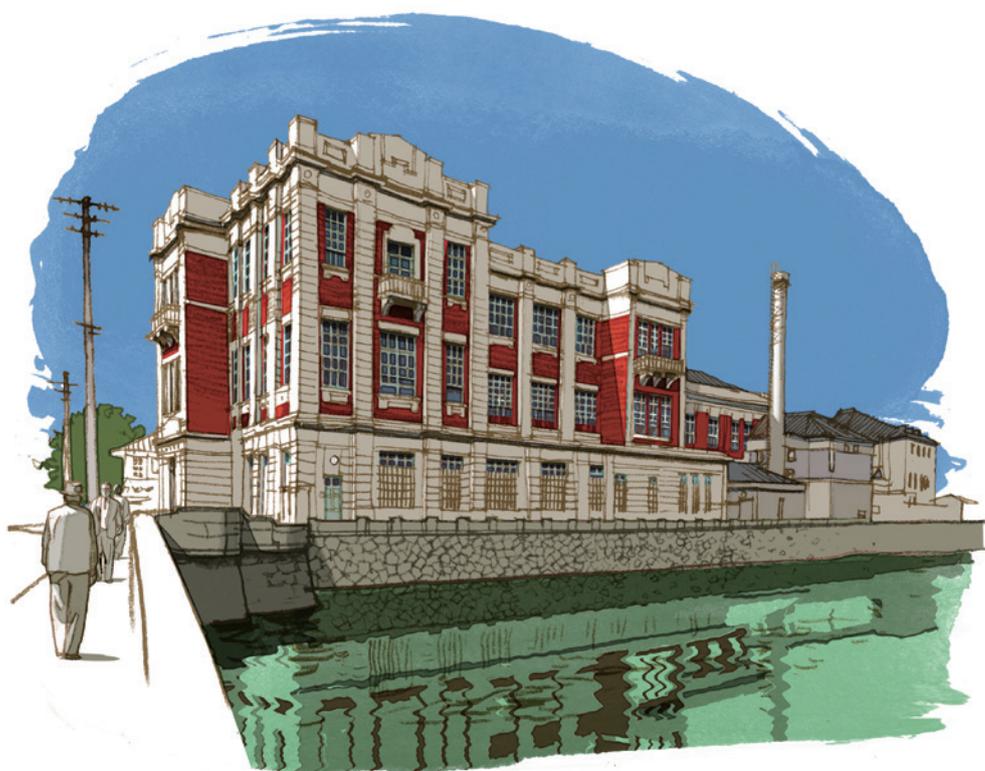


にちぎん

2019 NO.58

夏



インタビュー 扉を開く

増田明美 スポーツジャーナリスト

東京五輪・パラリンピックに期待する「楽」の心と新たなレガシー

地域の底力

佐賀県唐津市

今、あらためてふるさとを誇り魅力を発信する佐賀県唐津市

対談 守・破・創

斉藤 淳 J PREP 斉藤塾代表

若田部昌澄 日本銀行副総裁

英語をきっかけに自ら探究する力を育む

エッセイ “おかね”を語る

荒木飛呂彦 漫画家 「お金」と「スタンド能力」について

「お金」って何だろう？ 考えれば考えるほど訳がわからなくなって、難しくなって、やっぱり最後は訳がわからなくなる。

僕の亡き父親が、「お金はね、ちゃんと使えば自分の所に戻ってくるものなんだよ」とか、「お金は自分たちが大好きで、お金がある所にどんどん集まってくるんだよ」とか言っていたけれど、いまだに僕は「本当なのか？ 適当なのか？ はっきりとわからない事を子供に教えちゃって大丈夫？」と思ったりする。また、「お金を稼ぐってというのは、汚い行為だから神社にお賽銭して浄財するんだよ」とも言っていた。「マジ本当!」まあ、他の人からも同じような事を聞いたこともあり、とりあえず、ひねくれてもよくないので、信じてたままに奉納とか浄財はしている。

でも、本当のところはお金の正体は全く理解していない。

僕の漫画『ジョジョの奇妙な冒険』に「スタンド」という能力が出てくるのだが、それは超能力のような目には見えないけれど「存在している力」^{パワー}を、具体的に目に見える形あるものとして、絵で描いている。そこで、「お金」というものの能力を、「スタンド」として絵でどう描こうかと考えてみた。

まず、お金には「コインと紙幣」があり、それは物と物との交換を数字に置き換えるこ

「お金」と「スタンド能力」について

荒木飛呂彦



絵・江口修平

とで便利にするために生まれたのだから、この「コインと紙幣」の姿こそ既に「スタンド」の概念と違ってよい形だ。絵に描けるッ！でも、さらに考えていくと、お金は物との交換だけでなくアイデアや欲望といったものにも支払われるし、見栄とかプライドといった役に立たないものにも使われる。そもそもデータ上の数字としてのお金は、この世にちゃんと、本当に全部存在しているのか？ お金は流通の過程で手数料を取られたり、証券だの宝石だの土地だのに姿を変えたりして、かなり得体が知れない。

僕の考えた「スタンド」能力にはルールがあつて、①基本的に一人が一つのスタンドを持つ。②距離が遠くなれば、力も弱くなっていく。③スタンドの姿やデザインは基本は変化しない。でも、「お金」はひとつでいくつもの能力があるし、世界の遠く離れた場所でも同じような力を発揮できる。その姿もどんどん変えていける。「スタンド」のルールに違反する存在だ。「スタンド」のように「お金」をどうやって絵にすればよいのか？ 出来るのかなあ……。やはり考えるほど訳がわからなくなるというのが、今の結論。お金の全体像を理解できて、絵に描けるなら、とても良いなあ。

あらか・ひろひこ●漫画家。1960年生まれ。1987年より「週刊少年ジャンプ」で連載を開始した『ジョジョの奇妙な冒険』は絶大な人気を博して誕生30年を突破、シリーズ累計発行部数は1億部以上。現在第8部『ジョジョリオン』を漫画誌「ウルトラジャンプ」に連載中。高級ブランドとのコラボや、仏伊での展覧会開催など、国際的な評価も高い。





- 2 エッセイ／“おかね”を語る
「お金」と「スタンド能力」について 漫画家 荒木飛呂彦
- 4 インタビュー／扉を開く
増田明美 スポーツジャーナリスト
東京五輪・パラリンピックに期待する「楽」の心と新たなレガシー
- 9 地域の底力——佐賀県唐津市
今、あらためてふるさとを誇り魅力を発信する
佐賀県唐津市
- 16 対談／守・破・創
齊藤 淳 J PREP 齊藤塾代表
若田部昌澄 日本銀行副総裁
英語をきっかけに自ら探究する力を育む
- 20 新連載・歴代日本銀行総裁小史～ Short History ～ 第1回
初代総裁 吉原重俊
- 22 FOCUS → BOJ 20 日本銀行金融研究所 経済ファイナンス研究課の仕事
各国の中央銀行関係者や世界トップクラスの経済学者が集う
「国際コンファランス」の運営を担う

日本銀行のレポートから
26 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2019年4月—
28 「金融システムレポート」—2019年4月—
- 32 トピックス
日本銀行券の改刷および500円貨の改鑄について ほか
- 35 AIR MAIL from Basel
精密なスイス時間

表紙のことば

日本銀行福岡支店は、昭和十六年（一九四一）十二月一日、県から譲り受けた産業奨励館を改装し開設されました。太平洋戦争直前の福岡市は、北九州工業地帯を支えた金融の要であり、軍司令部の所在地でもありました。

昭和二十年（一九四五）六月、空襲により市中心部のほとんどが焼失してしまいました。表紙の初代店舗も被弾しましたが、宿泊していた職員の決死の消火活動により焼失は免れました。こうして空襲被害を辛うじて免れ、那珂川岸にチョコレート色の風格ある外観を誇った同店舗は、市民の皆さまにも親しまれました。

その後、初代店舗は老朽化が進んだことなどから、現店舗所在地へ新築移転しました。ところが、現店舗へ移転後の昭和二十七年（一九五二）三月、初代店舗は出火により旧金庫館を除き焼失してしまい、職員だけでなく市民も心を痛めました。

現店舗は現在、建て替え工事を行っています。新たな店舗も皆さまに親しんでいただけることを願っています。



スポーツジャーナリスト

増田明美

Akemi Masuda

マラソン・駅伝中継のわかりやすい解説でおなじみのマラソン元日本代表の増田明美さん。現役選手時代は日本記録を次々に塗り替え、世界記録も樹立し、「天才ランナー」の名をほしいままにした。しかし、期待されたロス五輪では途中棄権。そのときの苦い教訓から、東京オリンピック（五輪）・パラリンピック（パラ）に臨もうとしている選手たちに温かいエールを送る。また五輪・パラが開催国の社会にもたらす影響について、取材で感じた思いも織り交ぜながら語っていただいた。



東京五輪・パラリンピックに期待する 「楽しむ」の心と新たななレガシー

「楽しむ」精神で走れなかったロス五輪

——選手時代の増田さんは女子マラソンの黎明期を支えた天才ランナーでした。競技を始めたきっかけを教えてください。

増田 高校の恩師との出会いがきっかけです。中学までは軟式テニス部。「エースをねえ！」の岡ひろみに憧れていました。でも、駅伝大会に助っ人で出場したときに男子も含めてごぼう抜きしたんです。それ途中から陸上部に移りました。そのときに成田高校陸上部顧問の瀧田詔生先生が勧誘してくださって、先生の家に下宿しながら、陸上競技を専門的に始めま

した。

振り返ると、子どもの頃から走ることが好きだったんですね。実家から小学校まで二キロ半の道のりでしたが、私は「忘れ物ナンバーワン」とニックネームをつけられるほど忘れ物ばかり。通学の途中で忘れ物に気がついて、集団登校の班長さんに「先に行つて、すぐに追いつくから！」と言って実家に走って帰り、また走って集団に追いつく。そんな毎日でしたね。でも、そうやって走っているときは気分がいい。何が好きなのかなと考えてみると「風」な

んです。ゆっくり走っているときの風をまとっている感覚。ちよつとペースを上げると今度は風を切っている感覚になる。四季折々の匂いを風から感じるんですね。子どものときからしょっちゅう走っていたのは、そういうことが好きだったからじゃないかな。実際、実家の裏のミカン山などが遊び場で、鬼ごっこをしたり、かけっこをしたり、走ることが日常の一つでした。

——記録や順位を目指してマラソンを走るときも、風や景色を楽しめますか。

増田 現役引退後は景色を感じながら走れるようになりました。選手時代は景色を楽しみ余裕はありませんでした。電車で

乗っているときに窓に流れている景色に近いても言いまじょうか。調子がいいときは足がスイスイ動いて、意識して見ているわけではないのに、移ろう周りの景色が目に入ってくる。そんな感じでした。

——増田さんは一九八四年のロサンゼルス（ロス）五輪に出場されましたが、当時のトレーニングはどのような内容だったのでしょうか。

増田 女子マラソンはロス五輪で初めて正式種目に採用されたのですが、その頃の練習は、日本陸上競技連盟の方針で「八月のロスは暑いから、暑い場所です徹底的に走り込みなさい」と。私は、宗兄弟と一緒にニュー

カレドニアや宮古島で合宿して、三五度を超える暑さの中で四〇キロ、ときには五〇キロも走り込みました。瀬古利彦さんや佐々木七恵さんも別の場所でも同じような練習をして、全員疲れ切ってしまったんです。五輪本番のスタート前に……。瀬古さんは一週間前から血尿が止まらなくなつて「俺、あまりに辛くて最後は母親に電話したんですよ」って。

今、私の好きな言葉は、論語の「知・好・楽」なんです。学問でもスポーツでも、芸術の分野においても、「それを知っているだけの人は好きな人に及ばない、それを好きな人は真に楽しめる人には及ばない」ということです。原晋監督率いる青山学院大学の陸上競技部みたいに、強いチームほど「知・好・楽」の精神でその競技に取り組んでいる。私はロス五輪で棄権しましたが、今振り返ると、知・好・楽の「知」で終わっていたから、結果がついてこなかったんだなと思うんです。

——ロス五輪まで、増田さんは

日本記録を一二回更新し、世界記録も樹立されています。それなのに自分に自信がなかったと伺ったのですが。

増田 日本の中ではありましたが。国内では敵なしでしたし、男子ばかりがライバルでした。私があんまり強いから、走っている私のふくらはぎに唾を飛ばしてくる男子選手もいました。ただ、瀧田先生に言われる通り

東京五輪の日本代表選手に どう声をかけるか

——増田さんは六四年生まれ、前回の東京五輪が開催された年です。二度目の東京五輪が一年後に迫ってきましたが、東京で開催される五輪への思いをお聞かせください。

増田 日本にどれくらい多くの外国人が来るのだろうか、想像するだけでワクワクしますね。躍動感のある光景が目に見えます。そうした競技自体の盛り上がりも楽しみなのですが、五輪は、開催国にとって社会や日常生活が変わるきっかけ

に練習していて、精神的に自立できていなかったと思います。主体性が足りなかったですね。

だから宮古島で合宿中、地元女子高校生に五〇〇〇メートル走で負け、それまで経験したことのない不安にさいなまれました。そんな自信のない状態で臨んだロス五輪は、マラソンを楽しめるような状態には程遠かったです。

などを行っているところですが、五輪に臨む選手というのはどのような心境になるものですか。

増田 私の選手時代と比べて、プレッシャーを楽しめる選手が増えていると思います。今どきなのかもしれませんが、競技と向き合いながらも心のあり方が違うのでしょうか。試合も含めて競技生活を楽しんでいきますね。たとえば五輪選手村でも、代表選手は物おじすることなく他国の選手たちと積極的に交流しようとしています。ボディランゲージを交えて話し、ジャージなどを交換しているのです。この「開かれた感じ」は頼もしいですね。私たちの時代はみんなおどおどしちゃって、他国の選手が近くに来ただけで逃げてしまっていましたから。

になると思うんです。実際、先輩方に六四年の五輪当時のことを聞いてみると、「わが家は朝ごはんを食べていたのがパンになったよ」とか「ちゃぶ台がテーブルになった」という方もいらして。スポーツの祭典である五輪が、その国にもたらす影響の大きさは計り知れません。

二〇二〇年の五輪では、日本にどのような変化が起こり、レガシー(遺産)として残っていくか、そういう楽しみもあります。

——現在、各競技で最終選考会

ただ、そんな今どきの選手であつても、母国開催の五輪は、相当なプレッシャーがかかるでしょう。前回大会のリオデジャネイロ五輪は日本から現地まで応援に行った人がそう多くないから、選手は日の丸を見て喜んだり勇気をもらったりしたと思



ますだ・あけみ ● 1964年千葉県夷隅郡岬町（現・いすみ市）生まれ。私立成田高等学校在学中に中・長距離種目で、82年2月にマラソンでそれぞれ日本新記録を樹立。メダル候補として出場した84年ロサンゼルス五輪では16キロ地点で無念の途中棄権。92年に現役引退するまでの13年間に日本最高記録を12回、世界最高記録を2回更新した。引退後はスポーツジャーナリストとして執筆活動や、マラソン・駅伝の解説に携わるほか、講演、テレビ・ラジオ番組の出演など多方面で活躍。2017年に放送されたNHK連続テレビ小説『ひよっこ』ではナレーションを務めた。現在、大阪芸術大学教養課程教授、一般社団法人日本パラ陸上競技連盟会長等も務める。主な著書に自伝的小説の『カゼヲキル1〜3』（講談社）、『認めて励ます 人生案内』（日本評論社）など。

「人」に焦点を当てた取材

—— 増田さんのマラソンや駅伝中継の解説は、細やかな取材で情報もたくさん。とてもわかりやすく引き込まれます。

増田 ありがとうございます。選手については、「選手である前に人なんだ、この人を紹介したい」という思いでお話するようにしています。子どもとときはどんなお子さんだったのか、座右の銘は何なのか、好きな人はいるのか、そんな風に人に焦点を当てるようにしてらん

です。それは永六輔えいろくすけさんの影響が大きいですね。永さんは、現場取材をととても大切にされていました。取材とは材を取ることで、現場に行つて自分で見聞きしなさい、という取材の原点を教わったのです。解説に関しては自分ではあまり意識していませんが、読書の影響があるかもしれないですね。本のおかげで語彙を増やすことができたので、本好きが役に立っているのでしょうか。

街と心のバリアフリーを未来のレガシーに

—— 二〇一八年六月には日本パラ陸上競技連盟（パラ陸連）会長に就任されました。会長職はボランティアでの活動と伺いましたが、どういう経緯で引き受けられたのですか。

増田 以前からパラの競技が好きで、大会や合宿で取材をするうちに、選手たちと親しくなり

ました。パラ陸連の前会長さんがお年を召されて職を退くことになった際、選手の方からも私を推薦する声があったと聞いています。パラ陸連は予算が少ないことや、いろんな面で大変だということもわかっていました。選手たちの応援団長になろうと。今は全国各地で開催され

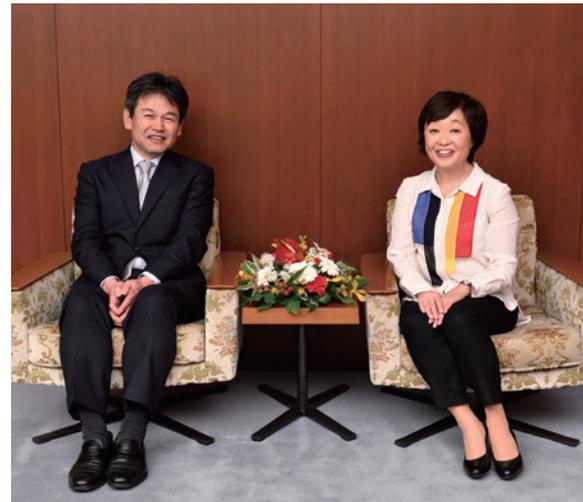
うんです。それが東京では日本の応援一色になるはず。「がんばれ、がんばれ」って声をかけられる。こんなにがんばっているのに、まだがんばらなければならぬのかと、そうした声援が選手にとっては辛くなるかもしれません。

—— それに潰されるな、ということ、五輪を経験された先輩としてどう伝えていきますか。

増田 五輪前、私はいろんな人から「がんばれ」って声をかけられるのが、本当に辛かった。思うように走れない自分が応援される、その空気の中にいるこ

とが耐えられなくなつたんです。それで結局自分に負けて途中棄権という結果に。ですから選手たちには、がんばれではなく、「四年に一度の大舞台で自己ベストを出せたら、メダルを取るのと同じくらいすごいよ」と言いたいんです。五輪は、代表選手だけではなくコーチ、トレーナー、スポンサーなども四年という長い時間をかけて準備して臨みますので、何か大きな渦の中にいるような雰囲気になります。そんな渦の中で競技して、過去の自分を超える記録が出せたら、本当に素晴らしいことです。

とが耐えられなくなつたんです。それで結局自分に負けて途中棄権という結果に。ですから選手たちには、がんばれではなく、「四年に一度の大舞台で自己ベストを出せたら、メダルを取るのと同じくらいすごいよ」と言いたいんです。五輪は、代表選手だけではなくコーチ、トレーナー、スポンサーなども四年という長い時間をかけて準備して臨みますので、何か大きな渦の中にいるような雰囲気になります。そんな渦の中で競技して、過去の自分を超える記録が出せたら、本当に素晴らしいことです。



るパラ大会にできるだけ足を運んで、選手たちの声を拾い集めています。

——選手たちから改善を求める声も聞かれますか。

増田 たくさん出てきますね。たとえば、「世界選手権の代表選考の方法をもっと早く知らせて欲しい」と言われることがあります。また、現場で気づくこともあるんです。今年の東京マラソンは、大迫傑選手が低体温症で途中棄権したように、とても寒いなかで行われました。私は車いすの選手たちの応援に行ったのですが、スタート地点で二〇分ぐらい待たされてしまった。最大の発熱器でもある足の筋肉が使えない車いすの選手

たちは、体温をなかなか上げられません。みんな震え方が尋常ではなかった。気象条件が良くない場合、車いすの選手たちはスタートの直前に外へ出るようにしないと。私が現場で気づいたことも今後のレースで改善につなげていきたいですね。

——「東京パラリンピック」を楽しみにしている人も多いですが、五輪に比べて歴史は浅いですが、健常者スポーツにはない競技もたくさんあって面白いですね。

増田 そうなんです。ボッチャとかゴールボールとか、健常者がプレーしても面白いですよ。それを「障がい者スポーツとは言ってほしくない」とパラの選手たちは話していますね。パラアイスホッケーの日本代表だった上原大祐さんは「オンスポーツ・オフスポーツ」という呼び方を提案しています。たとえば、ゴールボールは、目隠しをした選手たちが相手ゴールに向けて鈴の入ったボールを転がして得点を競う競技ですが、これは、目はオフ、鈴の音を聞く耳はオンですよ。ウィルチェ

アーラグビーでは、車いすを利用する足がオフで、上半身はオンにしてプレーすると。障がい者スポーツではなくオン・オフスポーツ、これってすごくいい発想だと思います。

——パラ選手をめぐる環境はどうご覧になりますか。

増田 まだまだ良い環境とは言えないと思っています。ジュニア選手育成の段階ではサポートが少なく、自費で大会や合宿に参加する選手もいます。ただ、東京五輪・パラの開催が決まって以降、改善している部分もあるので、その動きが二〇年で終わらずに、そこからもっと加速して欲しいんです。

バリアフリー化は競技の会場では進みましたが、その会場に行くまでに疲れてしまう、と選手たちは言います。街のバリアフリー化が進んでいないからですね。今回の東京五輪・パラを契機にそれが改善されたら、日本全体で増えている高齢者の方にとっても暮らしやすくなりま

ればいいですね。

——ちやぶ台からテーブルへと六四年の東京五輪が日本の生活様式に変化をもたらしたように、今回パラが日本を変える契機になるかもしれません。

増田 一二年のロンドン大会はパラリンピックのお手本のようにならねえ。私は仕事で滞在し、競技会場を回りました。街のバリアフリー化はそれほど進んでいません。一七世紀などの建物を残そうとしているので、階段が多かったりする。でも、ロンドンは何が進んでいるかといったら、心のバリアフリー。たとえば車いすの方が美術館の古い建物を訪れると、スタッフや周りの人がすぐに手を貸していました。障がい者と健常者がすごく自然に接しているんです。二〇年の東京大会では、街だけでなく、心のバリアフリーもレガシーとして残せるといいなと思います。

——東京五輪・パラがさらに楽しみにになりました。本日は、ありがとうございました。

地域の底力——佐賀県唐津市

今、あらためて ふるさとを誇り 魅力を発信する 佐賀県唐津市

歴史的資産、祭り、伝統的工芸品。
歳月を経て大切に受け継がれてきた
まちの誇りを広く知らしめることで、
唐津市はさらなる前進をはかる。

唐津市のまちなかに建つ「旧唐津銀行 辰野金吾記念館」。
1997年まで佐賀銀行唐津支店として営業が行われた後、市に
寄贈された。日本銀行本店本館ほか全国に残る洋風近代建築の
設計を担った、地元出身の建築家辰野金吾が監修したもの。



唐津市にある多彩な資産を あらためて発信していく

佐賀県北西部に位置し、福岡県に隣接する唐津市は、県内では佐賀市に次いで二番目に多い約一二万二〇〇〇人の人口を有する。この地の歴史は古く、縄文時代の遺跡で日本最古の水稲耕作跡「菜畑遺跡」も発掘されている。また「魏志倭人伝」に記された弥生時代の末盧国ではないともいわれる。

唐津市一带は、朝鮮半島に近い九州北西端という地域ゆえ、古から文化や人が渡ってくる日本の玄関口、そして交易の拠点でもあった。数多くの歴史舞台に登場したが、中でも文禄元年（一五九二）に始まった文禄・慶長の役では日本の政治・経済の中心となった。

「朝鮮半島への出兵基地として豊臣秀吉が名護屋城を築き、その命のもとに集結したおよそ一四〇の諸大名が陣屋を構えました。七年ほどの短い期間ではありましたが、唐津には約二〇万人が集まる大都市ができたんです」

そう語るのは、二〇一七年から唐津市長を務める峰達郎氏だ。名護屋城跡を中心に二三カ所の陣跡が国の特別史跡に指定され、徳川



縄文時代晩期から弥生時代中期にわたる水田跡が発掘された「菜畑遺跡」は、国指定史跡。市街地近くにあり、水田や竪穴式住居が復元されている。

家康、加藤清正、黒田長政など歴史好きの心をくすぐるそうそうたる武将たちが陣屋の主として名を連ねる。

加えて、豊臣秀吉によって当地に封ぜられていた寺沢広高が、慶長七年（一六〇二）から七年の歳月をかけて唐津城を築城。その後、昭和四十一年（一九六六）に、文化観光施設として五層五階の天守閣が建てられ、まちを見下ろしている。

「名護屋城、唐津城と、秀吉ゆかりの城が二つもある。大きな歴史的資産です。秀吉が遺したのは城だけではありません。兵の鼓舞と戦没者の供養のために当時おこなわれた綱引きが、今も『呼子大

綱引』という祭りとして受け継がれています」

唐津の祭りといえば、「唐津くんち」がもとも知られる存在だ。二〇一六年には全国一八府県三三件の祭礼行事とともに、「山・鉦・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録されたが、峰氏によれば、市内には唐津くんち以外に



唐津市北西部の鎮西町に残る名護屋城跡は、総面積約17ヘクタール。建設当時は大阪城に次ぐ規模を誇り、周辺約3キロメートル圏内に諸大名の陣屋が築かれた。



「今後の観光対策強化のために、隣接する福岡県糸島市や九州の玄関口である福岡市とともに、九州北部地域の連携を進めていきたい」と唐津市長の峰達郎氏は話す。

名護屋城の解体資材を利用して築城されたといわれる唐津城。現在の天守閣は1966年に天守台跡に建てられた。最上階の5階からは、唐津のまちや唐津湾の景色が一望できる。



もおよそ一七〇を数える祭りや文化伝承事業が受け継がれているという。

「二〇〇五年、〇六年におこなわれた一市六町二村の合併により、唐津市だけでこれだけ多くの文化伝統を受け継ぐことになりました。ただ、残念なことに、そのほとんどは広く知れ渡ってはいないんです」と峰氏は話す。

こうした歴史的、文化的資産に加えて、日本三大松原まつぼに数えられる「虹の松原」などの美しい眺め、呼子のイカや佐賀牛をはじめとする山海の美味、さらには唐津焼もある。

「『唐津に何がある?』と聞かれたときに、『何でもある』と言えただけのものが唐津にはそろっている。それが故に『唐津と言えは



唐津湾沿岸に幅約五〇メートル、長さ約四・五キロメートルにわたり一〇〇万本ほどのクロマツの林が広がる虹の松原は、一七世紀初頭に植林が行われた。玄海国定公園の一部。

これ」というものをアピールできていかなかった。市長就任の際、僕は唐津の力を伸ばす約束をしましたが、そのひとつに発信力があります。唐津の魅力をうまく発信すれば、確実に観光につながる。一度来ていただければ、リピーターになってくださる。そう思っています」

一方で市民に対しては、「唐津プライド」というテーマを掲げた。

「唐津は、食や文化面だけでなく、気候が温暖で災害が少ないなど、何げなく過ごしている日常が実はとても恵まれている。唐津人としてそれに気づき、誇りにし、ふるさとを世界にPRしていきたいましようというものです」



玄界灘の波が玄武岩を浸食してできた、唐津の景勝地のひとつ「七ツ釜」。名称は7つの洞窟が並ぶことに由来し、遊覧船でその洞窟を間近に見ることができる。

ただ、唐津市も他の地域と同じように人口減少が課題。合併時と比べて約一万人減少し、行政も頭を悩ませる。

「戸数は五万数千でほぼ横ばい。ということとは、単身世帯が増えていくんですね。半数近くが高齢者という地域もある。大きな商業施設や大企業が少ないため、若い世代は利便性や雇用を求めて市外に流出する傾向にあります」

その打開策として市民が集える環境をつくりたいと峰氏が力を注ぐのが、ファミリー層が楽しめる娯楽施設の建設だ。人気を博する公営競技場の敷地を活用し、子どもたちが遊べるアトラクションを導入する計画が進められている。

また、これまで取り組みが遅れていた企業誘致に関しては、化粧品分野での産学官連携組織として誕生した「ジャパン・コスメティックスセンター(JCC)」に期待がかかる。

「二〇一三年にフランス・コスメティックバレーと協力連携協定を締結し、JCCを設立しました。現在はそのフランスをはじめタイ、台湾、イタリアなどのコスメティック関連企業と連携。二〇〇社以上にご参加いただき、いくつかの企業はすでに唐津で操業しています。こうした動きが地域の雇用や消費につながればいい。少しずつですが、手ごたえを感じはじめています」



元日以外の毎日午前中に開催される呼子の朝市。特産品のイカをはじめとする新鮮な魚介類や干物、野菜などを売る店が約200メートルにわたり並び、観光客でにぎわう。



唐津曳山取締会総取締の大塚康泰氏は「唐津はくんちがあるから人のつながりがきちんと保たれている」と話す。後ろは大塚氏が住む京町の曳山「珠取獅子」。全14台の曳山は、祭りの時期以外でも唐津神社近くの「曳山展示場」で見学できる。

神事である祭りを守り 子どもたちに継いでいく

唐津市の誇り。その代表格が、唐津くんちだ。文化の日をはさむ十一月二〜四日の三日間にわたり開催され、約五〇万人の観光客が国内外から訪れる。

とりまとめ役である唐津曳山取締会の八代目総取締大塚康泰氏によれば、「ヤマ」と呼ばれる曳山は現在一四台あり、一八一九年から七六年にかけて作られたものだという。曳山が巡行する一四の町の区分けは、江戸時代からほとんど変わっていない。

「唐津くんちは、唐津神社の秋季例大祭。唐津大明神である住吉三神は海から来られた神様です。一四カ町を清めるために曳山を曳



くんです。くんちは単なるフェスティバルでも遊びでもなく、神事なんです。この認識を守り続けることができれば、唐津くんちが途絶えることはないと思っ

ています。全国的に見れば、伝統行事を未来へと受け継ぐ人材の確保が課題となっていて、地域が少なくないが、唐津では後継者に事欠かないと大塚氏は話す。

たとえば幼稚園、保育園では、曳山の名を組み込んだ「手遊び歌」の替え歌が歌われている。小学生になると、各町内でおこなわれる笛の練習に参加する。

「そういう流れを経てヤマに興味を持ち、自然と唐津くんちに参加したいと思う子どもたちが増えてくるんです。私たちは社会教育の一環を担っている、という意識

も強く持っています。

子どもたちが大きくなって祭りに参加すれば、地区のつき合いや人間関係を学ぶことにもつながりますから」

「本筋は変えてはいけません。でも、将来の唐津くんちのためにやるべきことはやりますよ。近年、曳山の修理のための材料が不足しています。そこで、県と市から山を借りて二〇一八年からアカガシの植林を始めました。これを利用できるのは早くて一〇〇年先と気が遠くなるような話ですが、材料の希少価値が高まるなか、今やっておかなければならないんです」

多くを語らずとも魅せる 唐津焼は静かな観光大使

祭り同様、唐津の名を冠した誇れるものに、唐津焼がある。その歴史は四二〇年以上前、安土桃山



唐津市最大の祭りである唐津くんち。「エンヤ、エンヤ、ヨイサ、ヨイサ」のかけ声のなか、14台の曳山が旧城下町をまわる。右手奥の鳥居は、唐津神社。

時代にまでさかのぼると話するのは、中里太郎右衛門陶房の十四代中里太郎右衛門氏だ。代々唐津藩の御用焼き物師を務めていた中里家には、初代が一五九六年に焼き物を手がけたという記録があるそうだ。

「唐津焼の特徴は、素材で温かいこと。貫入というひび割れができて、使ううちにどんどん色が変化していくのも魅力です。何十年どころか何百年の歳月を経ても、唐津焼は変化していきんです」

興味深いのは、明治以降減少していた窯元数が、今では約七〇軒を数えるほどに息を吹き返してきたこと。なかには、海外出身の陶芸家もいるとか。

中里太郎右衛門陶房の十四代中里太郎右衛門氏は、唐津出身の篠笛奏者佐藤和哉氏や地元料理人とも手を組み、唐津と日本の伝統文化の発信に努めているという。



「一般的に伝統産業の担い手が減りつつあると聞きますが、唐津焼に関しては若手を中心に窯元が増えていますから、皆さん驚かれません。唐津焼はきらびやかさがなく、渋い良さがある。そうした唐津焼特有の趣が多く、陶芸家をひきつけているような気がします」

一方で、世界的に知られる有田焼とは異なり、唐津焼の認知度は国内外ともまだまだ低いと中里氏は語る。

「ですから唐津焼を理解してもらうために、さらには唐津焼を通して日本の伝統文化を世界に知ってもらうためにどうするべきかと日々考えています」

その課題に対して中里氏は海外のイベントに積極的に参加し、唐津の名前を広めるいわば観光大使

唐津焼は上の器のように作られた趣をたたえているのが特徴だが、中里氏の作品には鮮やかなブルーに彩られた器も見られる。



唐津駅前では観光客を迎えるのは、唐津くんちの曳山のひとつ「赤獅子」をかたどった像。高さ約3.5メートル、重さ約2.1トンと、唐津焼の像としては最大のものだ。

として活動している。フランス、イタリア、イギリス、タイ。いずれの地でも、披露した作品は高い評価を受けたという。

「器は言葉を紹介しなくても、見て感じてわかってもらえる。タイで『いい焼き物とは、どういうものですか?』と質問を受けた際、『それは、人の心を打つものです』と答えたところ、どよめきが起こりました。唐津焼を通じて日本人の心を知ってもらえたのかもしれないが、そういう反応は逆に新鮮ですね」

地元では、ほかの窯元と連携してイベントを開催。そのひとつ、五月の連休中にまちなかの商店街

を利用して催される「唐津やきもん祭り」は、八年の歳月を経て毎年三万人の人が訪れるほど人気を博すようになった。

加えて、唐津焼の陶片を模した唐津焼陶片せんべいを開発するなど、中里氏は「これまでの伝統にないことに挑戦したい。いろいろなつながりで、世界に唐津焼を広めたい」と話す。

「去華就実」を守りつつ唐津の未来を思う

唐津は多くの功績ある先人たちが生まれ育った地でもある。後に触れる建築家の辰野金吾のほかに

も、早稲田大学学長や早稲田実業学校の校長を務めた経済学者の天野為之、丸の内オアイス街の基礎を築いた建築家の曾禰達蔵、九州ほか全国の炭鉱開発に力を注いだ麻生政包ら、明治維新後、日本の近代化に影響を及ぼした人々を数多く輩出した。そう語るのは、宮島醤油株式会社代表取締役社長で唐津商工会議所会頭でもある宮島清一氏だ。

「その理由には、英語教育を行う洋学校『耐恒寮』が一八七一年に創設された際、後に日本銀行総裁や総理大臣などを歴任した高橋是清が英語教官として赴任し、すばらしい教育をおこなったことがあげられます」

辰野金吾もまた、この耐恒寮を経て海の向こうへ渡っている。

「それにも増して強調したいのは、江戸時代を通じて唐津の少年教育が非常にすぐれていたということ。耐恒寮の生徒たちは英語こそ素人でしたが、漢文の知識においてはすぐれていた。高橋是清は学生たちに負けないよう、この地で必死に漢文の勉強をしていったそうです」

宮島醤油代表取締役社長の宮島清一氏。1882年創業の宮島醤油は現在、唐津市内事業所の約400名を含め全国で700名近い従業員を抱える。



宮島氏によれば、江戸時代の唐津は漢文をはじめ民間教育が盛んだったとか。そこには、二七〇年間に大名家が六代かわった歴史が影響しているという。

「この地にゆかりの薄い殿様に對して忠誠心が弱かったこともあり、代々ある大庄屋が中間管理職として大きな役割を果たしてまいりました。庄屋は業績を上げるため教育や産業の振興を手がけ、競い合って民間塾をつくりました」

また、古くから唐津は、大陸、朝鮮半島に向かって開かれ、当地を詠んだ歌が万葉集に何十首も見られるほど。その唐津に住む人の氣質を、宮島氏はこう語る。

「郷土愛が非常に強いですね。よそをうらやましがるとは、唐津

が一番と思っている人たちが多いと思います」

宮島氏が会頭を務める商工会議所の考えも、同様だ。

「唐津の良さを認識し、それを生かしていく。歴史と文化のまちづくりをしつかりやろうというのが、唐津の経済界の基本的なスタンスです。住みよい、上品なまちであるということが一番大事で、それを崩す必要はない。観光、とりわけインバウンドに関しては、巨大な免税店などはありませんが、焼き物や景色、食事などを楽しんでいただきたい。そういう路線でいいと思います」

宮島醤油本社の応接室には、唐津藩主の直系で、海軍中将や宮中顧問官を務めた小笠原長生が、同社創業者七世宮島傳兵衛に送った書「去華就実」が社是として掲げられていた。この言葉は、「表面的なこと、華やかなことを捨て、実質あることに専念せよ」という意味だが、質実な歴史的資産を守ってきた唐津のまちな、侘びた魅力をつたえる唐津焼をほうふつとさせ印象深かった。

唐津出身の建築家 辰野金吾の名を 広めるために

歴史的資産としては、一九二一年に竣工した「旧唐津銀行」が新たに脚光を浴びている。県の重要文化財に指定された建物は、前述

した辰野金吾が監修し、その弟子の田中実が設計を手がけた。赤いれんがと白い御影石の組み合わせや屋根の上に王冠のように小塔やドームを載せる、「辰野式」と呼ばれる独自の様式が見られる。

江戸時代末期に唐津の下級武士の子として生まれた辰野金吾は、イギリスに留学の後、日本の近代建築の先駆的存在として数多くの

洋風建築を手がけた。日本銀行本店本館、東京駅丸の内本屋、大阪市中央公会堂、奈良ホテルなどが今も残るが、辰野の地元ではその功績をたたえる意識はこれまで薄かったと話すのは、「唐津赤レンガの会」会長の田中勝氏だ。

佐賀銀行唐津支店としての役割を終え、建物は二〇一一年から一般公開されていたが、文化財としての旧唐津銀行をより力強く発信するために、「辰野金吾」の名をつきたい。その願いをかなえるのに、辰野金吾没後一〇〇年となる二〇一九年を絶好の機会ととらえ、同会では三一七六名の署名を集め、建物を所有する唐津市に働きかけた。尽力は実り、辰野金吾の命日

唐津赤レンガの会会長の田中勝氏は、日本国内だけでなくフランスにまで赴いて唐津くんちの囃子のパフォーマンスを披露するなど、長年にわたり唐津の観光面での魅力発信に力を注いできた。



にあたる三月二十五日、旧唐津銀行は別称を「辰野金吾記念館」とする承認がおりた。

その喜びをかみしめつつ、唐津赤レンガの会の発足のきつかけとなった一二年前のできごとを田中氏は振り返る。

「東京で観光バスに乗った際、東京駅は辰野金吾設計という説明があったものの、残念ながら彼の出身地などにはなにも触れられなかったんです。私からすれば、辰野が佐賀県唐津市の出身であることぐらいは言っておしかなかったのですが……。そういう思いから郷土の誇りである辰野金吾をもっと発



「旧唐津銀行 辰野金吾記念館」には、窓口のカウンターほか明治時代から受け継がれてきた空間が残る。一角には、唐津焼でできた辰野金吾の胸像も展示されている。

信しなければとスタートしたが、唐津赤レンガの会の前身です」

辰野金吾記念館の別称が付されたことにより、まちの注目度は高まりつつあると田中氏は話す。辰野金吾の命日には慰霊祭が行われ、唐津市では、唐津焼の炭釜主となった高取伊好の邸宅もまた、唐津市の歴史的資産のひとつ。約二三〇〇坪の敷地に建つ屋敷には、能舞台も備えられている。



れ、今後は記念館での展示の充実がはかられるが、田中氏にはさらなる思いがある。

「福岡市の赤煉瓦文化館（旧日本生命保険株式会社九州支店）、北九州市の西日本工業倶楽部会館（旧松本家住宅）、大分銀行赤レンガ館（旧二十三銀行本店）、武雄温泉楼門など、九州に残る辰野金吾の作品をまわる記念ツアーができればと思っています。まずは九州からはじめ、東京駅、日本銀行、奈良ホテルなど全国へと広げていきたいですね」

守りつつ攻める 唐津流が未来に花開く

地に根付く良きものは守りながら、唐津は少しずつ進化している。二〇一八年には初めて、海外のクルーズ船が唐津に寄港。一九年には地元の老舗ホテルがよりグレードアップした新館をオープンさせ、駅前誕生する商業施設には長期滞在客、いわゆるバックパッカー向けの簡易宿泊所が設けられるなど、観光客の受け入れ態勢が着々と整備されている。

また、唐津をはじめとする佐賀県を舞台としたアニメーション作品「ユーリ!!! on ICE」「ゾンビランドサガ」が話題となり、物語に描かれた場所を数多くのファンが訪れるようになった。これまでと異なる層が唐津へと旅すれば、まちが活性化するだけではなく、市の埋もれている資産に光が当たれる可能性もある。



絶景のビューポイントとして知られる標高約284メートルの鏡山から眺めた虹の松原と唐津湾。晴れた日には、海の向こうに壱岐の島が見えることもあるという。

対談

守

創

破

英語をはじめとする日本の教育現場における課題とは何か。新しい知識を生涯探究していくための「教養」とは。米国のイエール大学で教べんを執られた後、現在は日本で英語塾の代表を務める齊藤淳氏と若田部昌澄副総裁が未来を見据えつつ語り合う。



日本銀行副総裁

若田部昌澄

Masazumi Wakatabe

1965年神奈川県生まれ。87年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、90年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了、91年早稲田大学政治経済学部助手、94年トロント大学経済学大学院修士課程修了、98年早稲田大学政治経済学部専任講師、2000年早稲田大学政治経済学部助教授、05年早稲田大学政治経済学術院教授、17年コロンビア大学経営大学院日本経済経営研究所客員研究員。著書に『危機の経済政策』（日本評論社）など多数。18年3月日本銀行副総裁就任。

英語をきっかけに 自ら探究する力を育む



J PREP 齊藤塾代表

齊藤 淳

Jun Saito

1969年山形県生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業、イエール大学大学院政治学専攻博士課程修了、博士号。ウェズリアン大学客員助教授、フランクリン・マーシャル大学助教授、イエール大学助教授、高麗大学客員教授を歴任。各大学で「国際政治学入門」「東アジアの国際関係」等の授業を英語で担当したほか、2002～03年衆議院議員（山形4区）を務めた。12年に英語塾 Logos を起業（13年、現「J PREP 齊藤塾」に改称）。著書に『10歳から身につく問い、考え、表現する力 ぼくがイエール大で学び、教えたいこと』（NHK出版新書）など多数。

英語が広がる世界
わくわくするような経験を

若田部 齊藤さんは、米国の名門大学で政治学について教べんを執られた後、二〇一二年に東京と故郷の山形県酒田市に英語塾を開校され、現在、その塾を主宰しておられます。塾を開校された経緯についてお話しいただけますか。

齊藤 私は、上智大学の大学院から米国イエール大学に留学しました。イエール大学大学院で政治学の博士号を取得した後、同大学などで六年ほど政治学を教え、母の介護のため帰国しました。その際、大学の教壇に立つことも考えましたが、それ以上に自分がやりたいことをダイレクトに実現できると考えて、今の英語塾の前身となる塾を開きました。

若田部 ご自身のやりたかったことについて具体的にお話しいただけますか。

齊藤 大学の教員にしても英語塾を主宰するにしても、私自身、一貫して「不平等や格差の解消に挑む」というテーマを持って取り組

できませんでした。米国で政治学者だったときには、議員定数の地域別格差を是正するとどうなるかが研究テーマの一つでした。帰国後は、東京と地方の格差です。なかでも英語教育に関する格差について考えると、自分が生まれ育った山形など地方は東京と異なり、小さい頃から英語教育を受ける選択肢がそもそもないところが多い。住んでいる地域によって良質な英語教育に接する機会に差がないようにできないか、という問題意識がありました。あるいは日本で生まれ育つこと自体、英語を使って仕事をするにあたって不利な条件にならないかなど、いろいろな意味で、格差や不公平を小さくできないかと。そういう英語に関する格差を自らが作った塾で解消していこうと考えました。

若田部 確かに、世界で使われている大学の標準的な教科書は英語で書かれたものが多いため、英語を母語とする人たちは、そうでない人に比べて有利ですよ。

齊藤 一般に各国で使われている大学の一般教養の入門書はわかり

やすい。そういう書籍は大概英語で書かれています。そうしたことが一つとっても、英語で学べる技能を手に入れることは、さまざまな可能性が広がるわけです。日本の子どもたちには、そういう可能性を秘めたわくわくするような経験をしてほしいと思っています。

他の生徒にどれだけ刺激を与えたかを問う米国の学校教育

若田部 日本の子どもたちに英語を教える中で、気づかれた課題はありますか。

齊藤 日本の英語教育には二つの問題点があると思います。一つは、どの段階まで到達すれば英語を習得したとみなすのか、生徒も保護者も着地点の目標がないことです。ここまでは英語の学習をする、ここから先は英語で学習するという切り替えが明確でない人が多いと感じます。私どもの塾では、大学で英語を使った授業に対応できるように、さらに英語で議論までできるようにする、という目標設定を提案しています。

二つ目の問題点は、日本では書

くことを重視しすぎて、話して意思疎通をはかるトレーニングが不十分なことです。作文だといことを書くのに、口頭で表現できない。話してコミュニケーションするトレーニングができていない状態で英語を学び始めるため、それが英語習得の足かせになっているのではないかと思うことが多いですね。

若田部 それは英語教育に限らず、日本の教育全般にいえる課題かもしれないですね。

齊藤 ご指摘の通りだと思います。論理的に話すことで物事を伝えるトレーニングをすることが大事です。話すことにより意思疎通をはかることの意味は、学びの共同体の中で知識を共有し、深めながら前に進むということにあると思います。米国の教育現場では、自分の発した言葉によって他の生徒にどれほど刺激を与えることができるとかということが非常に重視されます。日本では、書くことばかりを重視しているため、勉強した成果が自分にしか帰属せず、話すことほどには周囲に影響を与えるこ

とができません。日本の教育を考える時に、こうしたことを意識する必要がありますと思います。

若田部 一般に、日本人は英語が不得意と言われます。極論かもしれませんが、それなら全員が無理して不得意な英語を学ばなくてもいいのではないかと、という意見も聞かれます。こうした意見についてどう思われますか。

齊藤 英語を学ぶとどの生徒が伸びるのか、習得した英語によってどのような形で社会に貢献してくれるのか、といったことがあらかじめわかっていたら、全員に学んでもらわなくてもいいのかもしれない。しかし現実には、事前にそうしたことはわからないわけです。そうであるなら、選抜された特定の人だけではなく、一律で学ぶのは理にかなっていると思えます。私自身、学生時代は数学が苦手でしたが、高校までに基礎的なことを学んだおかげで、大学院博士課程の経済学の授業は何とかわかりました。どの教科でも基礎的な部分は学んでおいた方がいいと思います。

子どもの強みを生かす 英語教育

若田部 英語教育に限らず、日本の教育の現状についてはどのように思われますか。

斉藤 日本では、公立小学校のカリキュラムより一年早く進む塾に入り、中学入試で高得点を取って良い学校に進学するというような、いわば出し抜きゲームのような状況であるように感じます。また、母語が日本語ではない外国出身の子どもが増えている中で、そういう子どもたちにも日本語をどう教えるかという現代的な課題もあります。そうしたなかで、社会全体で教育の水準を上げ、そのために資源を投入していく、という発想に立たないといけないと思います。英語塾で教育に携わっている私としては、社会全体を底上げするという発想に立てる、そんなリーダーを育てたいと思っています。

若田部 日本人が英語に苦手意識を持つのは、教え方の問題だという声も聞かれますが、斉藤さんはどう思われますか。

斉藤 例えば、昔、いくつかの脈絡

のない英語の例文を、お経を唱えるようにして暗記した経験をされた方もいらつしやると思います。そうした苦行のようなことをしてもつらいだけですし、苦手意識を持つてしまいい、結局英語から遠ざかってしまつたという方が多いのではないのでしょうか。それよりは、好きなものもついた、生きた文を覚える方がよほど効果的だと思います。私どもの塾では、ビデオ教材を使って、それぞれの場面と関連した例文を覚えるといった授業をしたり、小学生であれば、ゲームなどを通して楽しみながら、自然な形で英語を習得することにも力を入れています。

若田部 小学校から英語を教えようとする昨今の英語教育の方向性についてはどうお考えですか。

斉藤 低年齢の子どもたちは、文法的に高度なことは当然理解できませんが、音を拾うのは上手です。英語教育を早期化するのであれば、その年齢の子どもたちの特徴を最大限に生かすように教えることがとても重要だと思いますね。あとは、親御さんが間違えながらも子どもの前で楽しそうに英語を使うというのが一番

いい。私どもの塾でもよく保護者の方から「私の下手な英語で読み聞かせをしていいのですか」と聞かれるのですが、それでいい。そのうち子どもの方が親より英語が上手になつて、それが子どもの自信につながつていくと思います。

eラーニングによる 学習の有効性と課題

若田部 日本銀行が事務局を務める金融広報中央委員会のテーマに、「金融リテラシー（お金に関する知識や判断力）の向上」があります（金融広報中央委員会の取り組みについては、本誌二〇一六年秋号の「FOCUS ↓ BOJ」をご覧ください）。この金融広報中央委員会の取り組みの一つが金融知識の普及です。例えば最近話題になつて

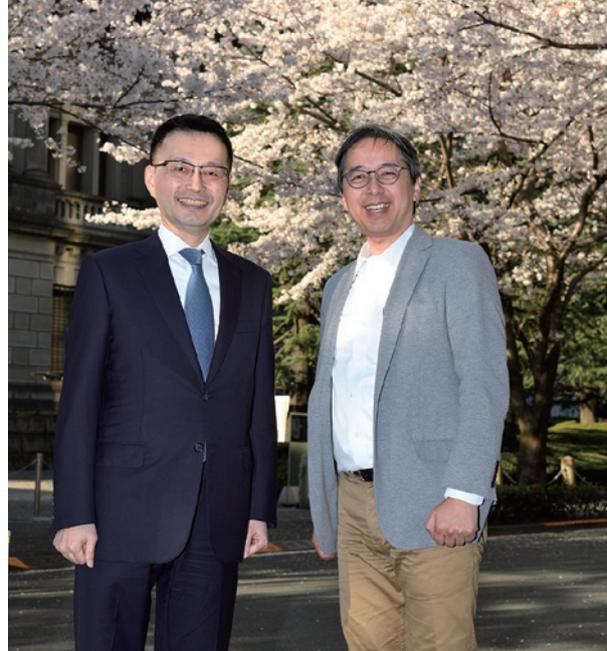
いる金融詐欺の場合、相手が巧妙になつてきているのは事実ですが、インフラ（基盤）という意味での金融の知識を広めていくことが、そうした詐欺への最大の予防策だとされています。ですから日本全国に金融知識を普及していきたいのですが、遠隔地に向いて

いくのにはどうしても限界があり、コンピューターや通信ネットワークを利用して学習する「eラーニング」と併せて進める必要があるのではないかと考えています。英語教育においてはいかがですか。

斉藤 われわれも、eラーニングを一部導入しています。文法などの講義はインターネットで見てもいい、それを使う練習を教室でやりましたよ。

ただ、eラーニングには課題もあります。一つは、いわゆるデジタル・ディバイド（コンピューターやインターネットを使いこなせる者と使いこなせない者の間に生じる格差）の問題。加えて、eラーニングでは自学時間が長くなるので、生徒のやる気の差異が学力格差拡大につながります。また、自分の発言で相手の言葉遣いが変わるなど、意思の疎通が成立する場面面でトレーニングを行わないと言語は上達しません。eラーニングではそうした力を十分育むのはなかなか難しいですね。

若田部 AI（人工知能）のような対話型の仕掛けがあれば、そ



ういった課題は乗り越えられるでしょうか。

斉藤 あくまでも現段階では、自動化された仕組みは、訴求力で人間に及ばないと言われます。若田部副総裁が目の前で語られるのと、ビデオ映像で語っておられるのを観るのでは、効果はまったく違いますよね。eラーニングが得意な事と対面でやるべき事をしっかりと見極めることが、教育の現場では大事だと思っています。

**教養とは知識ではなく
生涯学び続けるための基盤**

若田部 斉藤さんはご著書で、教養の重要性を強調されています。

米国で教べんを執られていたご経験も踏まえ、教養についてのお考えをお聞かせください。

斉藤 日本人は教養という言葉を聞くと常識や知識と考えてしまいがちです。私が考える教養は、生涯を通じて学び続けるための態度や基盤です。正しい知識を獲得していくというより、間違っている、あるいは時代遅れの知識を淘汰し、新しくしていくプロセスを教養と考えた方がいいのかもしれない。そのために必要なインフラやツールとして英語がある。ですから大卒入試のためではなく、学び続けるためのスキルとして英語を捉えてほしいというメッセージを発し続けていきたいと考えています。

若田部 教養とは、哲学者カール・ポパーの言葉ではありませんが、まさに「果てしなき探求」ということですね。

斉藤 そうです。そういう力を養うためには、一般教養の入門書を読んで何かを得るより、ごく限定されたトピックでも構わないので、深く掘り下げてみる経験をする必要があります。

米国の大学では、例えば東アジア宗教概論ではなく、鎌倉時代の日本の仏教を学ぶといった、ごく限定されたテーマに焦点を当てたコースが多くなっています。なぜそういう限定したテーマにしているのか。結局、概論や入門書は自分で本を読めば習得できる。重要なのは、自分で新しい知識を獲得し吟味するための方法を体得することです。限定されたテーマで、ゼロから何かを獲得する経験をしていくことが大事なのだと思います。

若田部 受け身で習うだけではなく、自ら深く学んでいくということですね。

斉藤 その通りです。決して知識の総量は増えないかもしれませんが、学生のうちにそういうトレーニングを積んでおけば、将来的にどんな分野にいつてもそのスキルというのには生きるとして、常に知識やスキルを更新し続けることができるでしょう。私自身の留学、そして教べんを執ってきた経験から、そう痛感しました。

若田部 そうした教養に通じるのかもしれませんが、日本の大学教

育と欧米の大学教育を比較して、欧米の方が古典を重んじる傾向がありますね。例えば、米国の大学では歴史家・政治家のアレクシス・ド・トクヴィルが著した『アメリカの民主政治』は必読文献とされています。

斉藤 欧米では、実際に作品を読み、自分にとってどのような意味があるのか、あるいは現代的な意味は何かということをとことん話し合っただけで納得するプロセスを踏むのが古典読解の一つのやり方です。日本ではそうした姿勢はあまりありません。

一般教養が、単に講義を聞いて知識を増やすことだと考えるのは、これから自立した社会人として情報の海を泳いで渡らなければならない人たちに對するトレーニングとしては古いと思います。日本でも、欧米の素晴らしい部分は取り入れながら、教養をいかに育んでいくべきかといった議論を深めていってほしいですね。

若田部 本日は、示唆に富んだお話をどうもありがとうございます。

歴代日本銀行総裁小史

第一回

初代総裁 吉原重俊

よしはらしげとし



【総裁任期】

明治15年(1882)10月6日～明治20年(1887)12月19日

「日本銀行総裁」と聞いて、どのようなイメージをお持ちでしょうか？この「歴代日本銀行総裁小史」のコーナーでは、歴代総裁の生涯をたどりつつ、総裁在任時に取り組んだことや当時の日本銀行の歴史などをご紹介します。第一回の今回は初代総裁の吉原重俊についてご紹介します。

吉原重俊は、弘化二年（一八四五）に薩摩藩士の子として現在の鹿児島県に生まれました。薩摩藩校「造士館」に学び、一二歳で漢文を読みこなすなど若くして俊才の名をとどろかせたと言われています。慶應二年（一八六六）に藩から選ばれて米英両国に留学し、明治二年（一八六九）には、日本人として初めてイェール大学に入学します。

米留学中の明治五年（一八七二）、岩倉使節団（注1）に随行する三等書記官（書記官とは官吏・国家公務員の官職名の一つ）として現地採用され、その後、外務一等書記官として在米国公使館に勤務します。明治七年（一八七四）に大蔵省（現財務省）に転じ、後に大蔵卿（大蔵大臣）となる松方正義の下で活躍、明治十三年（一八八〇）に大蔵少輔（大蔵次官級）となるなど、官僚としてのキャリアを着実に



日本銀行開業時の店舗が描かれた錦絵。当時の日本銀行は、旧永代橋（現在の日本橋箱崎町）のたもとにあった旧北海道開拓使東京出張所の建物を借り、一部改装して開業しました。この建物は、鹿鳴館を設計した英国人ジョサイア・コンドルが設計し、明治の名建築の一つと言われています。日本銀行が現在の日本橋本石町へ移転した後は迎賓などのために使われていましたが、関東大震災の際に焼失しました。



日本銀行開業の地である日本橋箱崎町に建つ記念碑。当時の店舗（本館）が彫られたプレートが碑面に取り付けられています。碑文には「明治十五年十月十日 日本銀行はこの地で開業した 明治二十九年四月 日本橋本石町の現在地に移転した 創業百周年を記念してこの碑を建てる 昭和五十七年十月 日本銀行総裁 前川春雄」と表記されています。

日本銀行本店本館に飾られている吉原の肖像画



（現在本館では改修工事を実施しているため、肖像画はご覧になれません）

積み上げていきました。大蔵少輔在任中の明治十五年（一八八二）に日本銀行創立委員に任命され、日本銀行開業とともに、三七歳というこれ以降の歴代総裁中最年少の若さで、初代総裁に就任しました。

吉原は、海外留学の期間が長かったことから、当時の役人としては、国際経済に対する造詣が深かったと言われています。総裁としては、当時、政府および全国各地の「国立銀行」が発行していた不換紙幣（注2）の回収を進め、日本銀行が発行する兌換紙幣（注3）を現金通貨の中心とすることを、手形・小切手の流通の推進に尽力しました。そのほか、国庫・国債事務のための体制整備を行い、取り扱いを開始しました。また、現職の日本銀行総裁としては極めて異例ですが、明治十八年（一八八五）に、

中央銀行制度の視察の名目で、一〇カ月ほど欧米諸国を巡っています。しかしながら、病魔に冒され、明治二〇年（一八八七）十二月、現職のまま死去しました。四二歳という若すぎる死でした。吉原は、東京の青山霊園に眠っています。



最初の日本銀行券。日本銀行は紙幣価値が回復した明治18年（1885）に最初の日本銀行券を発行しました。この日本銀行券は、銀貨との兌換が保証された「兌換銀券」でした。大黒の像が描かれ、「大黒札」と呼ばれていました。

（日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵）

※年齢は、満年齢で表記しています。

（注1）岩倉使節団／明治四年（一八七二）十一月から翌々年九月にかけて、江戸後期に諸外国と締結した条約の改正のための予備交渉および西洋文明の調査等を目的とし、欧米諸国に派遣された大使節団。外務卿（外務大臣）岩倉具視を正使とし、政府首脳陣や津田梅子ら留学生を含む総勢一〇七名で構成された。

（注2）不換紙幣／正貨（金貨・銀貨など）と引き換える保証のない紙幣。

（注3）兌換紙幣／同額の正貨（金貨・銀貨など）と引き換えることのできる紙幣。

日本銀行金融研究所 経済ファイナンス研究課の仕事

各国の中央銀行関係者や 世界トップクラスの経済学者が集う 「国際コンファランス」の運営を担う

二〇一九年五月、日本銀行本店において「国際コンファランス」が開催され、中央銀行関係者や著名経済学者による講演やパネルディスカッション、論文の発表などが行われました。この国際コンファランスは、日本銀行が定期的に主催するコンファランスのなかで最も規模が大きく、また、三六年にわたる最も長い歴史を持ち、金融、経済に関し多面的な角度から議論を行う場として定着しています。

このコンファランスを支えるのは、「金融研究所経済ファイナンス研究課」。約一年間かけて作り上げていく国際コンファランスを中心に、同課の業務を紹介します。

三六年にわたる歴史と高い評価を
未来へとつないでいくために

一九八三年から行われている国際コンファランスは、主要中央銀行が行う学術的なコンファランスのなかでも、特に長い歴史を有しています。二五回目となる今年の国際コンファランスのテーマは、「低インフレ・低金利環境のもとでの中央銀行デザイン」。国内

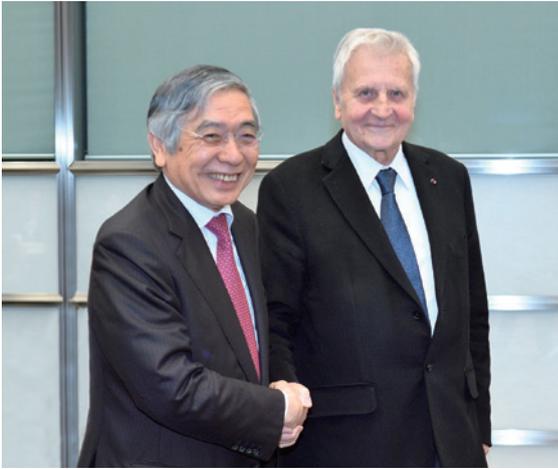
外から約一〇〇名が参加し、黒田東彦^{はるじ}総裁による開会挨拶に続き、ジャン・クロード・トリシエ前欧州中央銀行総裁による前川講演（後述）、論文報告、金融研究所海外顧問による基調講演、政策パネル討論が行われ、二日間にわたり活発な議論が展開されました。

コンファランスのコンテンツ（議論の内容）の検討、およびロジスティクス（後方支援業務）面での準備や運営を担うのは、金融研究



当日の会場の様子（撮影：野瀬勝一）

所の経済ファイナンス研究課に所属する約三〇名のスタッフです。課長の渡辺真吾さんは、「課の柱となる業務は、金融・経済の基



(撮影：野瀬勝一)

本的なメカニズムを理解するための研究。学界や海外中央銀行など外部との交流促進も重要な使命です。われわれが担う最大のイベントである国際コンファランスは、そうした当課の仕事の結晶と言えます」と話します。

コンファランスの要となるのは、一九八二年の金融研究所設立時の日本銀行総裁である故前川春雄氏の名を冠した「前川講演」です。前川講演について渡辺さんはこう言います。

「まずはテーマを選定し、それに沿って講演者の候補を絞っていきます。最終的には、中央銀行や国際機関での経験および学識等を踏まえつつ、大局的な見地からお話しいただける方に依頼しています。候補者はお忙しい方ばかりなので、その調整も容易ではありません」

せん」

前川講演のほか、政策パネル討論、論文報告についても、人選は人念に行われます。

「大事なものは、どのような方に来ていただければ、より有意義なコンファランスになるのかということですね。中央銀行は、最新の金融経済理論をいかに政策・業務に生かしているかが問われる組織。コンファランスでの議論は、理論的・技術的に優れているだけでなく、広い視野や実務家の視点が求められることから、人選は多様な観点から行います。また、欧米からアジア各国まで、参加者のエリアのバランスにも気を使っています」

アジアにおける金融・経済に関する有力コンファランスとして広く知られることから注目度も高いとのこと。コンファランスを、毎回充実した内容にすることによりその評判が浸透し、世界各国から一流の識者が多く参加するようになると、渡辺さんは話します。

「一九八三年の第一回では、当時のマクロ経済理論の二大潮流であるケインジアンとマネタリズムそれぞれのいわゆるノーベル経済学賞受賞者を招待しています(注)。当時携わった方が国際コンファランスにかけた並々ならぬ情熱を感じます。今後もそうした方々に参加していただけるようにしていきたい。一回一回がコンファランスの歴史を作っていきます。私たちは単に成功させることだけを

考えるのではなく、このコンファランスを未来にどうつないでいくかということを強く意識しています」

学界の最新情報を踏まえ テーマを選定

渡辺さんが、人選と並んで車の両輪と位置付けるのが、コンファランスのテーマ選定。コンテンツの検討を主に担う同課経済研究グループの岩崎雄斗さんによれば、テーマの検討が始まるのは、前年のコンファランス終了直後。今年のコンファランスについて言えば、最初の打ち合わせは、昨年コンファランスが終わったその日のうちに行われたそうです。

「金融、経済の分野において、世界各国でどのようなことが問題になっているのかを踏まえ、テーマを選ぶ必要があります。今年のテーマである『低インフレ・低金利環境のもとでの中央銀行デザイン』についても、利上げが進むかに思われた米国で、低金利環境の

(注) ケインジアンは、英国経済学者ジョン・メイナード・ケインズの理論に基づく経済理論を支持する学派。経済不況の際、その克服のため、政府や中央銀行による裁量的な介入の有効性を主張する。他方、マネタリズムは、米国のシカゴ大学教授だったミルトン・フリードマンを中心とした学派。ケインジアンが提唱する裁量的な政策に対し、一定のルールに基づいた政策を重視する立場をとる。第一回国際コンファランスには、ケインジアンからジェームズ・トービン、マネタリストからミルトン・フリードマンが参加した。

論文報告をする須藤さん



更なる長期化が見込まれていることから、足もとの動向を捉えたタイムリーなテーマだったと自負しています」

時宜にかなったテーマや適切な論文報告者を選ぶため、岩崎さんをはじめスタッフは、常にアンテナを張り巡らしています。中央銀行関係者や学者が持つ問題意識、それに基づく議論の展開等を探ることを目的に、海外の主要な学会や中央銀行のコンファランスにも参加します。

「学界や中央銀行の人たちが、今なにに注目し、どう考えているのかを理解するには直接話を聞くことが重要です。論文が公表されるまでにはそれなりに時間がかかるため、論文を読むだけでは必ずしも最新の動向をフォ

ローできません。学会などでどのような議論が交わされているのかを、タイムリーに知る必要があります」

国際コンファランスの論文報告セッションにおいて、日本銀行の代表として論文を発表するのも、経済ファイナンス研究課の役割のひとつ。今年と同課経済研究グループ長の須藤直さんなおが、「長引く低金利と銀行部門の安定性について」と題する論文の報告を行いました。

「国際コンファランスでの論文報告は、金融政策を巡る日本での議論を効果的に発信するとともに、外からの目線で、その議論のあるべき姿を確認するという意味でも重要なことだと思っています」

須藤さんは、岩崎さん同様、テーマや講演者などの選定にも携わりましたが、通常の業務がそこにつながっていると云います。

「金融研究所では毎年、研究者の方々を国内外から招聘しょうへいし、ともに研究を行っています。長期の方で一年程度滞在されますが、人選だけでなく、お互いに刺激し合えるような環境作りも私の仕事です。直接顔をつきあわせて議論を深めるなかで初めてわかることも少なくありません」

こうした日常の業務を通じて外へと輪を広げていくことにより、国際コンファランスの内容も充実させていくことができると須藤さ

んは話します。

一流の参加者を迎えるための心配りと臨機応変な対応

国際コンファランスの開催を裏方として支えているのは、ロジスティクス担当のスタッフです。そのひとり、経済研究グループの原尚子さんなおこによれば、参加者への招待状の作成から、ホテルの手配に関するお手伝いまで業務は多岐にわたるとか。そこには食事メニューの選択など、夕食会や昼食会の準備、調整も含まれます。

「約三〇カ国から日本にお越しいただきまので、バックグラウンドや慣習は多様です。食事に関しても、たとえば宗教による制限から、ベジタリアン、アレルギーをお持ちの方までそれぞれの事情を入念に確認し、きめ細かく対応しています」

過去には発表者の来日が前日にキャンセルになるなどのトラブルが生じたことがありましたが、どのコンファランスも成功裏に終えたそうです。その秘密は徹底したシミュレーションにあるとのこと。

「急ぎよ仕事で来られない、フライトが遅れるなど不測の事態を常に想定して、どのような事態になっても臨機応変に対応できるような対処方法を考えています。またそうした不測の事態の際には、自分ひとりで抱え込まず、

他のスタッフと情報を共有し、連携して対処していくことも重要です」

さまざまな場面を想定した上で設定したスケジュールには余裕をもたせてあるものの、活発な議論により時間が予定よりオーバーすることも。コンファランスが盛り上がることはうれしい反面、緻密に組み立てられたその後の予定に影響が出ないよう苦心されるそうです。

「これだけのビッグイベントの運営は大変ではありますが、経済学者や各国中央銀行の幹部が一堂に会すること自体が刺激的ですし、最先端の研究の発表やハイレベルな議論が行われる場を作り上げていると思うと、やりがいがある仕事です」

二〇一五年の国際コンファランスからその準備に携わってきた佐々木真祐子さんによると、Wi-Fi環境へのニーズの高まりなど、時代の変化や海外の学会事情をふまえて、招待客へのおもてなしの内容を柔軟に変えているとのこと。佐々木さんは、「段取りが悪くて不快な思いをされる方がいないように心掛けています。運営が滞りなく終わってはじめて自分の仕事ができたと言えます」と話します。また、だからこそ、コンファランス当日に裏方の果たすべき役割は大きいとのこと。

「会場外からコンファランスの進行をうか

がないながら、次の予定に備えて、関係先に連絡・調整を行います。スムーズな運営に貢献できる

よう心掛けています。厨房や会場の設営、音声、警備など各プロフェッショナルとの緊密な情報の共有が成功には不可欠で、裏方のさらにウラでもまた多くのやり取りが繰り返されています」

そんな細やかな配慮が常に求められる仕事をする中で、参加者からの温かいねぎらい、感謝の声が一番の励みになるそうです。佐々木さんはこう言います。

「コンファランス終了後にお礼のメッセージを頂いたり、ほかの学会で『日本銀行の国際コンファランスはホスピタリティーが素晴らしいかった』と言われたとの報告があったり



当日の事務室の様子

すると、やはりうれしいですね」

課長の渡辺さんは、国際コンファランスの開催や日々の研究が国内外の経済、さらには人々の暮らしにすぐ影響するわけではないが、と前置きしつつこう言います。

「国際コンファランスの開催を含め、経済ファイナンス研究課の仕事の意義は『基礎的研究は、樹木にたとえれば根に相当し、一見地味ではあっても、非常に重要である。金融経済のメカニズムに関する理論的な解明は、事象の本質を正しく把握するための基礎である』という、故前川元総裁の言葉に集約されていると思います。中長期的な観点から金融経済の問題を解明し、日本銀行の政策・業務運営に貢献することを目指して、研究・議論を積み重ねています」

経済ファイナンス研究課の尽力により成功裏に終わった二〇一九年国際コンファランス。その議事録や一部動画は、それぞれ金融研究所のホームページ、日本銀行公式動画チャンネルで公開予定です。世界トップクラスの経済学者の発言や、最新のトピックに関するハイレベルな議論を、ぜひご覧ください。





日本銀行のレポートから

日本銀行は、1、4、7、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2019年4月の展望レポート（基本的見解は4月25日、背景説明を含む全文は4月26日公表）のポイントを解説します。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

— 二〇一九年四月 —

二〇一九～二〇二二年度の 中心的な見通し（図表1・2）

【景気】

当面、海外経済の減速の影響を受けるものの、二〇二二年度までの見通し期間を通じて、景気の拡大基調が続くとみられる。

輸出は、当面、弱めの動きとなるものの、海外経済が総じてみれば緩やかに成長していくもとで、基調としては緩やかに増加していくと考えられる。国内需要も、消費税引き上げなどの影響を受けつつも、きわめて緩和的な金融環境や政府支出による下支えなどを背景に、増加基調をたどると見込まれる。

【物価】

消費者物価（除く生鮮食品）の

前年比は、プラスで推移しているが、景気の拡大や労働需給の引き締まりに比べると、弱めの動きが続いている。

これには、①賃金・物価が上がりにくいことを前提とした考え方や慣行が根強く残るもとで、企業の慎重な賃金・価格設定スタンスなどが明確に転換するには至っていないことに加え、②企業の生産性向上に向けた動きや近年の技術進歩なども影響している。こうした物価の上昇を遅らせてきた諸要因の解消に時間を要している中で、中長期的な予想物価上昇率も横ばい圏内で推移している。

もともと、マクロ的な需給ギャップがプラスの状態が続くもとで、企業の賃金・価格設定スタンスが次第に積極化し、家計の値

上げ許容度が高まっていけば、実際に価格引き上げの動きが拡がり、中長期的な予想物価上昇率も徐々に高まるとみられる。この結果、消費者物価の前年比は、二％に向けて徐々に上昇率を高めていくと考えられる。

リスクバランス

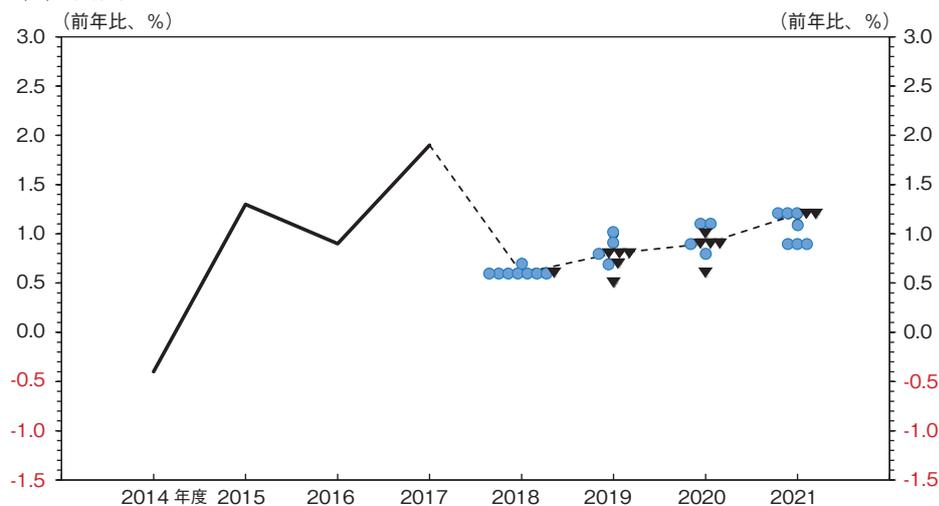
経済・物価ともに下振れリスクの方が大きい。物価面では、二％の「物価安定の目標」に向けたモメンタムは維持されているが、なお力強さに欠けており、引き続き注意深く点検していく必要がある。

金融政策運営

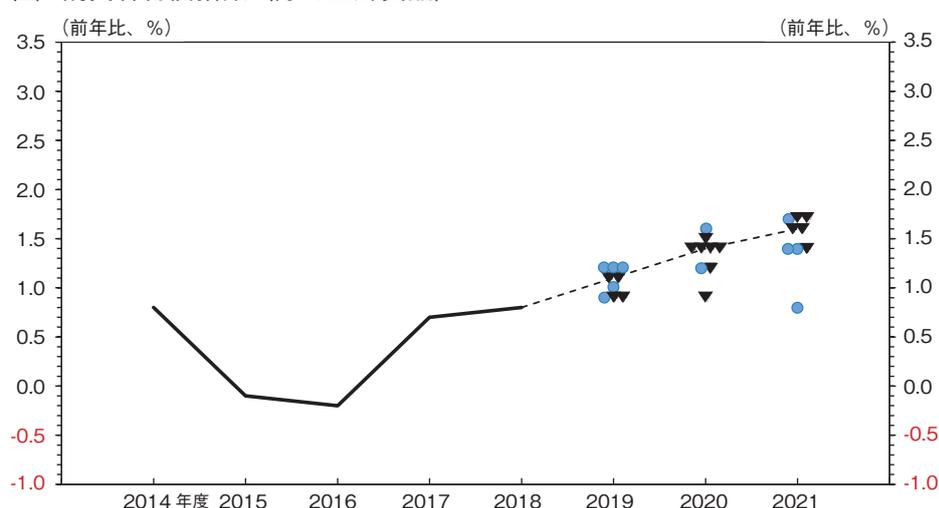
二％の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「長短金利操作付き量的・質的金融緩

図表1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

(注3) 消費者物価指数 (除く生鮮食品) は、2014年度、2015年度については、2014年4月の消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表2 政策委員見通しの中央値

(対前年度比、%)

| | 実質 GDP | 消費者物価指数 (除く生鮮食品) | (参考) 消費税率引き上げ・教育無償化政策の影響を除くケース |
|------------|---------|------------------|--------------------------------|
| 2018年度 | + 0.6 | + 0.8 | |
| (1月時点の見通し) | (+ 0.9) | (+ 0.8) | |
| 2019年度 | + 0.8 | + 1.1 | + 0.9 |
| (1月時点の見通し) | (+ 0.9) | (+ 1.1) | (+ 0.9) |
| 2020年度 | + 0.9 | + 1.4 | + 1.3 |
| (1月時点の見通し) | (+ 1.0) | (+ 1.5) | (+ 1.4) |
| 2021年度 | + 1.2 | | + 1.6 |

(注) 消費税率については、2019年10月に10%に引き上げられること(軽減税率については、酒類と外食を除く飲食品および新聞に適用されること)、教育無償化政策については、幼児教育無償化が2019年10月に、高等教育無償化等が2020年4月に導入されることを前提としている。

和」を継続する。マネタリーベースについては、消費者物価指数(除く生鮮食品)の前年比上昇率の実績値が安定的に2%を超えるまで、拡大方針を継続する。政策

金利については、海外経済の動向や消費税率引き上げの影響を含めた経済・物価の不確実性を踏まえ、当分の間、少なくとも二〇二〇年春頃まで、現在のきわめて低い長

短金利の水準を維持することを想定している。今後とも、金融政策運営の観点から重視すべきリスクの点検を行うとともに、経済・物価・金融情勢を踏まえ、「物価安

定目標」に向けたモメンタムを維持するため、必要な政策の調整を行う。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、金融システムの安定性を評価するとともに、安定確保に向けた課題について関係者とのコミュニケーションを深めることを目的として、金融システムレポートを年2回公表しています。本レポートの分析結果は、日本銀行の金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリング等を通じた金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督・脆弱性評価に関する議論にも役立てています。金融政策運営面でも、マクロ的な金融システムの安定性評価を、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素の一つとしています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <http://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/>

「金融システムレポート」

二〇一九年四月

二〇一九年四月号の 特徴と問題意識

今回のレポートでは、次の四つに力点を置いて分析を行った。第一に、今回ヒートマップにおいて、不動産業向け貸出の対GDP比率が「赤」（過熱方向でトレンドからの乖離が大きい状態）に転じたことを踏まえ、不動産市場について、バブル期との比較を念頭に置きつつ、幅広い視点からその金融安定上のリスクを分析・評価した。第二に、地域金融機関の収益力低下の背景を理解するため、わが国同様に低金利環境下にある欧州系金融機関との収益構造の比較を行った。また、将来の収益力

に対する市場参加者の見方が集約された株式市場の情報を利用して、わが国金融機関の潜在的な脆弱性を定量的に評価した。第三に、地域金融機関の収益力と自己資本比率の低下が継続していることを踏まえ、それが長引いた場合の金融安定への影響を定量的に把握する観点から、マクロ・ストレステストにおいて、目先のストレス発生を想定した定例のテストに加え、五年後のストレス発生を想定したテストを実施した。第四に、金融安定への影響が大きいと考えられる大手金融機関のシステムミックな重要性和デジタルイノベーションについて、BOJで分析した。前者については、システムミックな重要

性の一つの表れである海外との連関性・共振性の実情を取り上げた。後者については、金融機関の取り組み状況と、足もと幅広い取り組みが加速しているキャッシュレス決済の動きを整理した。要旨は以下のとおり。

金融仲介活動の動向

日本銀行の金融緩和を背景に、金融仲介活動は銀行貸出を中心に引き続き積極的な状況にある。国内貸出市場では、貸出金利が既往ボトム圏で推移し、残高は前年比二%台半ばのペースで増加している。大企業向けM&A関連貸出が増加しているほか、中小企業向けの設備関連貸出が幅広い業種で増加している。

とから、不動産市場を巡る脆弱性を注視していく必要がある。また、地域金融機関は、相対的に信用力の低いミドルリスク企業向け貸出に積極的に取り組むつつ地域の企業・経済を支援しているが、リスクに見合った利鞘を確保しにくい状況が続いている。先行きの信用コスト上昇に対する脆弱性にも留意が必要である。

金融循環の拡張的な動きは、足もと景気拡大に寄与しているが、やや長い目でみて、わが国経済の成長力が高まらない場合には、むしろバランスシート調整圧力を蓄積することで、経済に負のショックが発生した際の下押し圧力を強める方向に作用する可能性がある。

国際金融面では、海外貸出は全体として質の高いポートフォリオが維持されているが、海外金融機関との競争激化や外貨調達コストの高止まりを背景に、リスクがやや高い先への与信を増やす動きもみられている。有価証券投資でも、金融機関は海外クレジット商品や投資信託を積み増すかたちでリスクテイクを積極化しており、多様で複雑な市場リス

クを抱えるようになってきている。このため、世界経済の下振れ等を契機とするリスク性資産の幅広いリプライシングの影響を受けやすくなっている点には留意が必要である。

金融システムの安定性

わが国の金融システムは全体として安定性を維持している。金融機関は、上記のような脆弱性を考慮しても、リーマンショックのようなテールイベントの発生に対して資本と流動性の両面で相応の耐性を備えている(図表4、5)。

もともと、金融仲介活動の中核となる国内預貸業務の収益性が低下を続けている。これには低金利環境の長期化に加えて、人口減少に伴う成長期待の低下と借入需要の趨勢的な低下という構造要因による面が大きいと考えられる。こうした国内収益環境のもとで、大手金融機関はグローバル展開とグループベースの総合金融戦略を推進しており、システミックな重要性、海外との関連性を高めている。地域金融機関は、ミドルリスク企業向けや不動産業向けな

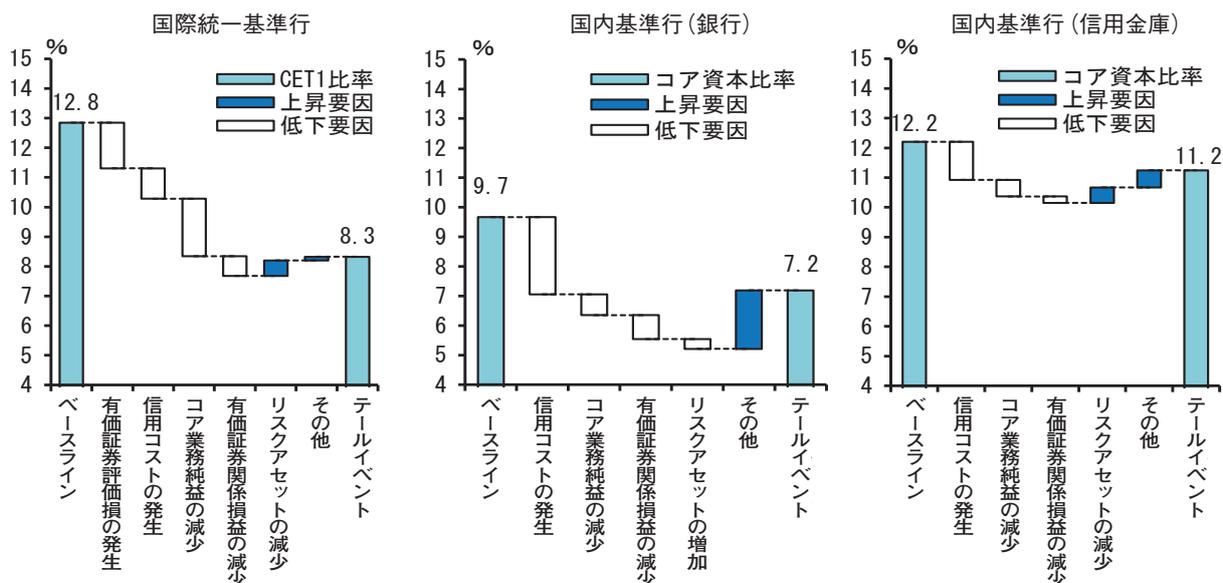
ど国内貸出や有価証券投資を積極化しているが、総じてリスクアセット拡大に見合った収益を確保できておらず、自己資本比率、ストレステータスは緩やかに低下している。こうした状況が長引くと、ストレステ時の信用コストや有価証券関連損失に伴う自己資本の下振れが大きくなる結果、金融面から実体経済への下押し圧力が強まる可能性がある(図表6)。

マクロプルーデンスの視点からみた金融機関の課題

金融システムが将来にわたって安定性を維持していく観点から、金融機関に求められる経営課題は、次の四点である。第一は、収益力向上に向けた取り組みの強化である。①リスクに応じた貸出金利の設定、②企業の課題解決や家計の資産形成支援を通じた役務収益力強化、③経営効率の抜本的改善が課題となる。また、これらを効果的に推進する観点から、経営統合やアライアンスも有効な選択肢となり得る。第二は、積極的にリスクテイクを進めている分野におけるリスク対応力の強化であ

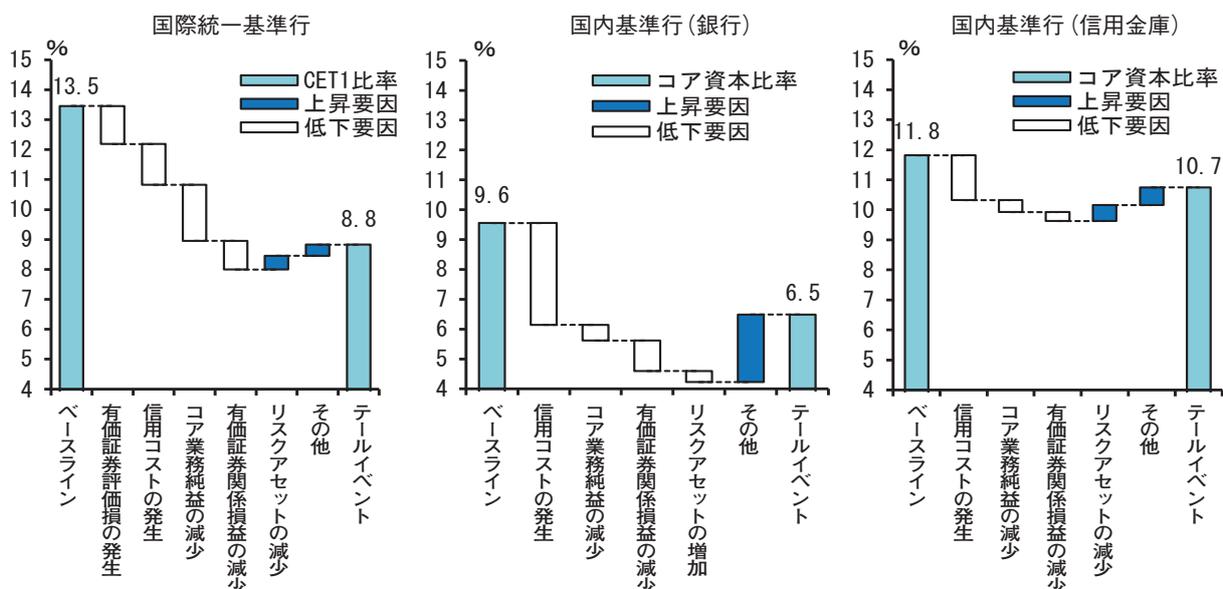
る。地域金融機関では、ミドルリスク企業向けや不動産業向け貸出、投資信託を通じる投資拡大等に対応した管理強化が挙げられる。大手金融機関には、システミックな重要性を踏まえた強固な財務基盤の確保、グローバルかつグループベースの経営管理等が求められる。第三は、デジタルイノベーションへの対応である。わが国でも、幅広いキャッシュレス決済への取り組みや、金融機関によるオープンAPI、AIやクラウドの活用等が進みつつある。金融機関はデジタル技術の活用方針を明確化し、それに応じたサイバーセキュリティ・情報管理体制を整備する必要がある。第四は、自己資本の適正水準や配当、有価証券評価益の活用方針等を含めた適切な資本政策の実施である。日本銀行は、考査・モニタリング等を通じて金融機関の取り組みを後押しするとともに、マクロプルーデンスの視点から、金融機関による多様なリスクテイクが金融システムに及ぼす影響について引き続き注視していく。

図表4 CET1比率とコア資本比率の要因分解（2021年度）



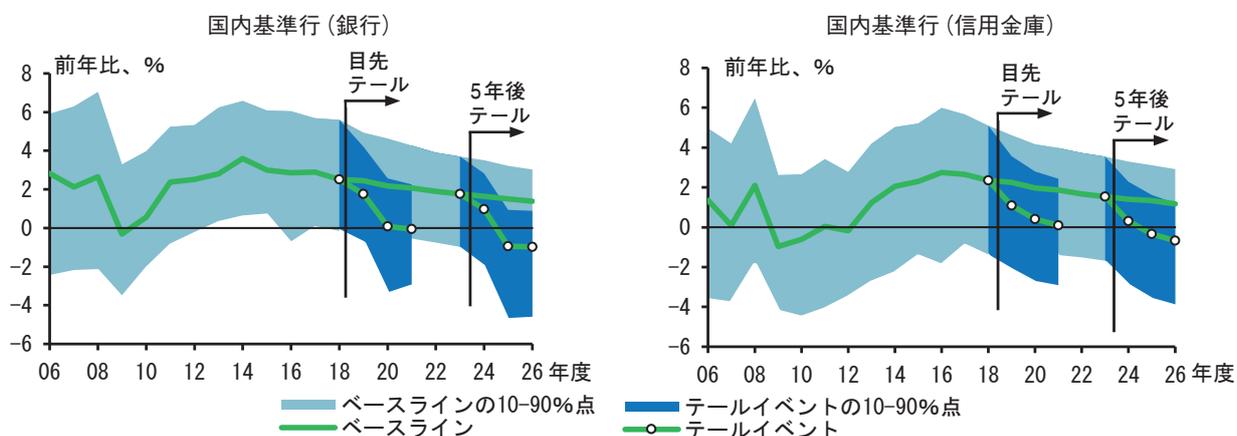
(注) シミュレーション期間の終期（2021年度末）における、ベースラインとテールイベント・シナリオ下の自己資本比率の乖離要因を表示。

図表5 CET1比率とコア資本比率の要因分解：借入需要減少ケース（2026年度）



(注) シミュレーション期間の終期（2026年度末）における、ベースラインとテールイベント・シナリオ下の自己資本比率の乖離要因を表示。

図表6 貸出残高：借入需要減少ケース



日本銀行券の改刷および五百円貨の改鑄について

▼財務省では、四月九日、偽造抵抗力強化等の観点から、日本銀行券の改刷および五百円貨の改鑄を行うことを決定し、公表しました。

▼日本銀行としては、今後、財務省等と連携しながら所要の準備を進めていく方針です。

1. 日本銀行券の改刷

(1) 主な様式

- ① 新たな偽造防止対策等
- ・ 高精度すき入れ（すかし）
- ・ 現行の「すき入れ」に加えて、新たに高精度なすき入れ模様を導入

・ 最先端技術を用いたホログラム（注）

一万円券および五千円券にはストライプタイプのホログラムを新たに導入。千円券にはパッチタイプのホログラムを新たに導入

（注）肖像の3D画像が回転する最先端のホログラム。銀行券への採用は世界初。

・ また、記番号について、現行の最大九桁から一〇桁への変更を予定

新一万円券 表



裏



新五千円券 表



裏



新千円券 表



裏



・ ホログラムをはじめ図柄等の細部については、今後、検討の上、決定予定。また、様式は所要の手続き等を経て、今後、告示で定めることとなる。

更を予定

- ② ユニバーサルデザイン（券種間の識別性向上等）
- ・ 指の感触により識別できる
- ・ マークの形状変更および券種毎の配置変更
- ・ 額面数字の大型化（表・裏）
- ・ 「ホログラム」および「すき入れ」位置を券種毎に変更
- ・ などを予定

③ 図柄（図表1参照）

- ④ 寸法（図表2参照）
- ⑤ 発行時期

二〇二四年度上期を目途

2. 五百円貨の改鑄

- (1) 主な形式等

① 新たな偽造防止技術

・ 形式等の細部については、今後、検討の上、決定予定。また、形式等は所要の手続き等を経て、今後、政令で定めることとなる。

・ 素材に新規技術であるバイカラー・クラッド（二色三層構造）（注1）を導入

・ 貨幣の縁に、新たに「異形斜めギザ」（注2）を導入

・ 貨幣の縁の内側に、新たに微細文字を加工

- ② 素材等（図表3参照）
- ③ 発行時期

二〇二二年度上期を目途

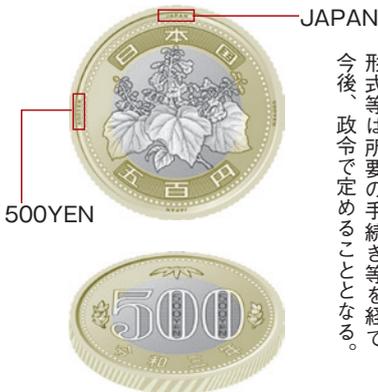
（注1）異なる種類の金属板をサンドイッチ状に挟み込む「クラッド」技術でできた円板を、それとは異なる金属でできたリングの中にはめ合わせる「バイカラー」技術の組み合わせ。

（注2）斜めギザの一部を他のギザとは異なる形状にしたもので、通常貨幣（大量生産型貨幣）への採用は世界初。

※ 注意事項

・ 現行の日本銀行券および五百円貨は、新しい日本銀行券および五百円貨が発行されたあとも、引き続き通用します。[現行の日本銀行券が「振込み詐欺などを騙った詐欺行為」に「ご注意ください」]

新しい500円貨



（画像提供：財務省）

国際コンファランスを開催

▼一九八三年以来、日本銀行は、金融研究所において国内外の著名な経済学者や中央銀行関係者を招いた国際コンファランスを開催しています。今年度は「Central Bank Design



国際コンファランスの様相 (撮影:野瀬勝一)

図表1 図柄

| 券種 | 表 (肖像) | 裏 |
|-------|--------|------------|
| 新一万円券 | 渋沢栄一 | 東京駅(丸の内駅舎) |
| 新五千円券 | 津田梅子 | フジ(藤) |
| 新千円券 | 北里柴三郎 | 富嶽三十六景※ |

(参考) 現行券

| 表 (肖像) | 裏 |
|--------|-------|
| 福沢諭吉 | 鳳凰像 |
| 樋口一葉 | 燕子花図 |
| 野口英世 | 富士山と桜 |

図表2 寸法

※富嶽三十六景「神奈川沖浪裏」(葛飾北斎)

| 券種 | 寸法 | |
|-------|--------------|---------------|
| 新一万円券 | 縦: 76 ミリメートル | 横: 160 ミリメートル |
| 新五千円券 | 縦: 76 ミリメートル | 横: 156 ミリメートル |
| 新千円券 | 縦: 76 ミリメートル | 横: 150 ミリメートル |

現行券と同一

図表3 素材等

| | 新しい 500 円貨 | (参考) 現行 500 円貨 |
|----|---------------------------|-------------------------|
| 素材 | ニッケル黄銅、白銅および銅(バイカラー・クラッド) | ニッケル黄銅 |
| 品位 | 千分中銅 750、亜鉛 125、ニッケル 125 | 千分中銅 720、亜鉛 200、ニッケル 80 |
| 量目 | 7.1 グラム | 7.0 グラム |
| 縁 | 異形斜めギザ | 斜めギザ |
| 直径 | 同右 | 26.5 ミリメートル |

under a Continued Low Inflation and Interest Rate Environment」(低インフレーション・低金利環境のもとでの中央銀行デザイン)をテーマとして、五月二十九日、三十日に開催しま

した。

▼当日の様相およびコンファランスの運営を担う金融研究所経済ファイナンス研究課の業務内容については、本誌二二ページ「FOCUS→BOJ」記事にて詳しく紹介しています。ぜひご覧ください。

第二十回情報セキュリティ・シンポジウムを開催

▼金融研究所情報技術研究センター(CITECS)では、三月二十七日に、「金融分野における機械学習システムの適切な活用に向けて」と題して第二十回情報セキュリティ・シンポジウムを開催しました。参加者は、情報セキュリティ技術に関わる金融機関関係者や研究者、システム開発・運用に携わる技術者など、約一〇〇名に上りました。講演では、機械学習システム(注1)を利用するうえでのセキュリティ上のリスクと対策のほか、その品質評価に関する研究やガイドラインの策定に向けた

最新の動向等が紹介されました。その後のパネルディスカッションにおいては、四名の外部の有識者が、金融機関が機械学習システムを金融サービスの提供に効果的に活用していくための留意点や課題等について活発な議論を交わしました。

▼近年、フィンテック(注2)が注目を集めるなど、金融サービスにおいて情報技術が果たす役割はますます大きくなっています。情報技術研究センターでは、

(注1) 機械学習システムとは人工知能(AI)の要素技術である機械学習を実装したシステム。

(注2) フィンテック(Fintech)とは金融(Finance)と技術(Technology)を組み合わせた言葉。金融サービスと情報技術とを結び付けたさまざまな革新的な動きを指す造語。



会場の様子 (撮影:中山利尚)

編集後記

■「好きこそ物の上手なれ」ということわざがありますが、今回の編集作業を通じて、物事を楽しむことの大切さを再認識しました。インタビューにご登場いただいた増田明美さんは、好きな言葉として「知・好・楽」をあげられ、ロサンゼルス五輪での途中棄権は、楽しめなかったことが原因とお話されていました。対談にご登場いただいた斉藤淳さんも、教養の土台としての英語を楽しく習得する方法を追求されています。自分自身の学生時代を振り返っても、勉強やスポーツを楽しむと思ったときは、必ずと言って良いほど成績も伴い、そしてそれがまた楽しさを増す好循環でした。逆に、何としてもここまで問題集を終えなければとか、野球部で打率や防御率を何とか維持しなくてはといった責任感や義務感が強くなりすぎたときは、当然楽しいはずもなく、結果もついてこなかったように思います。現実的には、楽しくないこともやらなければならないときもありますが、たとえばその後の趣味の時間やご褒美とセットにするなど、楽しくないことを楽しむ工夫も大切ですね。(中川)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。
(http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ(<http://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2019年夏号
編集・発行人 中川 忍
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

金融機関が情報

化社会において

直面する新たな

課題に適切に対

処していけるように、今後まさ

まざまな取り組みを行っていき

ます。



「日銀春休み親子見学会」を 開催（「日銀夏休み子ども特 別見学会」のご案内）

▼日本銀行本店では、三月二十六日～二十八日の三日間に

わたり、小学校四～六年生およ

び中学生のお子さまとその保護

者の方を対象に、「日銀春休み

親子見学会二〇一九」を開催し

ました。

▼見学会では、本店見学やお札

に関する体験学習などのプログ

ラムにご参加いただき、「一億

円の重さ体験やお金に隠された

ヒミツを知るこ

とができて楽し

かった」などの

感想が寄せられ



ました。

▼今回は、夏休み期間中の七月

二十九日～八月二日の開催を予

定しています。お申し込み方法

などの詳細は日銀ホームページ

をご覧ください。

「第一五回日銀グランプリ」 キャンペーンからの提言」 論文募集

応募締切：九月三十日（月）

▼「日銀グランプリ」は、学生
の皆さんを対象に開催する、金

融・経済分野の

論文・プレゼン

テーションコ

ンテストです。

二〇〇五年度から毎年開催して

おり、今年度も応募論文を募集

中です。

▼テーマは「わが国の金融・経

済への提言」です。応募に当たっ

ては、日銀ホームページ上の募

集要項をお読みください。多く

の学生の皆さんからの斬新な提

言をお待ちしております。





from Basel

精密なスイス時間

スイスと言えば、数々の有名な時計メーカーがある国とイメージされる方も多いかもしれません。資源に乏しかったスイスは、古くから金融、観光、精密機械といった高付加価値の産業に力を入れており、時計産業もその一角を担う形でスイスの経済を支えてきました。

毎年春頃、スイスのバーゼルで世界最大の時計見本市「バーゼルワールド」が開かれます。世界中から時計の生産者とバイヤーがバーゼルに集まり、最新トレンドの時計を目の前に、活気あふれる取り引きが行われます。

この時計産業と関係しているかどうかは定かではありませんが、スイスの人々は時間をきっちり守る国民性だと言われています。公共交通機関は正確なダイヤ運行であることが普通ですし、職場の会議な

どは、時間きっちり始めることが人々の共通意識（人によってはスイスとしての誇り）となっています。時間を守る感覚は国によってさまざまですが、スイスに移住してきた他国出身の人が会議に遅れてきたりすると、「君はまだ“スイス時間”に慣れていないね」と言われることもあります。

科学の実験などに使われる特殊な超精密時計の研究も進められていて、ベルンの研究所にある時計は3000万年たっても1秒すらずれない正確さだそうです。さすがに日常生活でそこまでの精密さは必要ありませんが、“スイス時間”は時間を守ろうという意識の高い日本人の感覚と近いですし、旅行者にとっても電車やトラムが時間通りに来るのはとてもありがたいことです。（国際決済銀行、バーゼル）

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



バーゼルにある国際決済銀行(BIS)の建物。各国の中央銀行・金融監督当局が世界の金融経済情勢や金融規制を議論しています。



左／スイス西部にある世界遺産の街、ラ・ショー・ド・フォン。スイス時計産業と結びついた都市計画の下で発展しました。時計職人の工房が並んでおり、手元が明るい作業環境を作るため、全ての窓が南向きに配置され太陽光が十分に入っています。

上／ラ・ショー・ド・フォンにある「国際時計博物館」では、写真のような古い仕掛け時計から最新の衛星時計まで、時計に関する多くの展示品を見学することができます。



にちぎん